

コープふくしま大震災対策ニュース

【がんばっぺ編 8】

2011年3月31日発行

対策本部にて取材中の
ライター筑波作成

1 産直の生産者さんを訪ねました！



▲旬菜市場には約 50 名の生産者と、5つの産直グ ▲地場野菜の売場には「がんばろう！ふくしま」と
ループが出荷していますが、出荷商品はまばらです。 添えられています。

福島市内は、30 日の午後くらいからガソリンスタンドの行列がなくなり、普通に給油ができるようになりました。少しずつ、日常に戻りつつあることを実感していますが、皆さんの心に大きな影を落としているのが“福島第一原発事故”です。

農産物への影響も大きく、福島県産の原乳や、葉物類などの野菜が路地やハウスを問わず出荷制限されています。さらに土中に放射性物質をすきこませてしまう恐れがあるからと「耕耘はしないように」、「田畑の作付けを数週間遅らせるように」という要請もあり、生産者は先の見えない状態が続いています。

こういった状況の中、コープふくしまの生産者はどのような思いを抱いているのでしょうか。コープふくしまあだたら店の産直コーナー、旬菜市場に出荷している二本松市のあだたら産直センターと生産者を訪ねました。

あだたら産直センターは、210 名あまりの生産者が加入し、米や野菜などを生産、出荷しています。例年なら、葉物類の出荷時期ですが、それができないため、出荷できるのは、ネギやシイタケ、卵、それに加工品程度。多くの会員が大きな打撃を受けています。

「作付けを遅らせるというだけで、生産するなということではないので、準備はしなければなりません。種や資材を購入しても本当に作付けできるのか、今年をあきらめなければいけないのか、その場合の補償など、まったく見えません。

仮に生産し、放射性物質が規制値以下でも、“福島県”というだけで市場から拒否されるかもしれません。もし、収穫物から規制値以上も数値が計測されたらどこに廃棄すればいいのか、その費用は誰が負担するかなど不安は尽きず、国が明確な判断を示してくれないと、先に進めないのです」事務局長の本多芳司（ほんだ・よしじ）さんは、そう話します。



▲生産者の佐藤佐市さん、契約栽培で苗の育苗も行っていますが、買う人がいるのかも心配です。



▲出荷できないために放置されたハウスのハウレンソウには、雑草が生えていました。

あだたら産直センターを通して、あだたら店に出荷する生産者の佐藤佐市（さとう・さいち）さんも、ハウスで生産した葉物類を出荷することができないでいました。

「耕耘しないように」との要請があるため、収穫もできずに放置されたままです。

有機認証を取って栽培している作物もありますが、今後はどうなるかもわからず「今までの苦労が水の泡」と嘆きます。

「ハウスから放射性物質が検出されるわけがないのに、出荷できないのは辛い。福島県産が一律出荷できないというのではなく、地域ごとに細かく土壌検査し、規制値以下かそうでないかを明確に区別するといった策を早くとってほしいです。」と佐藤さん。

原発の影響で、消費者の農産物への不安もつきません。産直センター事務局長の本多さんは、「生産者と消費者で不安をわかちあうような試みをしていきたい」と話します。

「たとえば、土壌検査や収穫物の放射性物質の検査などをする場に消費者の方にも立ち会ってもらい、規制値を下回っていることを確認できれば、安心できます。手間暇はかかりますが、消費者と生産現場の情報を共有し、互いの思いを話し合い、確認しあうことでしかこの事態を乗り越えることはできないのではないのでしょうか」

誰もが経験したことのない事態だからこそ、消費者と生産者がこれまで以上に密接な関係を築かなければいけないことを改めて思いました。

2 がんばれ！東北、がんばれ！東日本



全国からの寄せ書きや色紙も続々と到着しています。今日はコープやまぐちから生協まつりで書き込まれた組合員さんやその家族からのメッセージが届きました。子どもらしいのびのびした文字やかわいいイラスト付きの「がんばってね！」「災害なんかには負けないで！」といった言葉の1つ1つがコープふくしまでがんばるスタッフに勇気と元気を与えています。